

編集後記

高橋 一

今年も例年どうり『学問への招待』を特集いたしました。お忙しいなか心よく原稿を、お寄せ下さいました諸先生方にはあらためて御礼申し上げます。

さて一橋論叢では本号より『フォーラム』という欄を設けました。論叢の性格上、とかく執筆者からの一方通行になりがちですが、本欄は読者の考えも出来る限りとり上げようという趣旨から生れました。掲載論文に対する質問やコメント等がございましたら四百字づつ原稿用紙二〜三枚にまとめ編集委員会へお送り下さい。著者の返答と共にフォーラムに掲載いたします。百巻をむかえる論叢の活性化の為、学内外からの投稿をお待ちしております。(尚フォーラムへの掲載の是非につきましては、誠に僭越とは存じますが編集委員会で決定させていただきます。)

(一橋大学教授)

『フォーラム』

投稿 ソフト化について

加藤 雅

本論叢昭和六十二年五月号で宮沢教授は論説中において、ソフト化について「いささか安易で曖昧な言い方」という評価を下しておられる。そこでソフト化という表現を考えた当事者として一言反論したく、筆をとった。

筆者の理解では、ソフト化という用語は従来の産業構造論の枠の外にあり、むしろ一種の価値論の範疇に含まれるものである。その点はモノばなれも同様であって、同一の現象を別の側面から見ているものである。したがってソフト化はそれ自体産業構造を説明するものではなく、むしろ各産業の製品やサービスの性格の変化する方向を規定する。

しかし、これが産業構造の変化に何も関係ないというわけではない。現在の産業の変化は、いかにすればより高く売れる(それは当然消費者がそれに多く支払う用意があることを意味する)商品を見えるか、という方向にそって起っており、その原点はソフト化(ソフトの相対的価値がより高まる)にあると考えられるからである。

産業構造論的に言えば、教授も指摘され、それゆえソフト化とかモノ離れという表現はミスリードイングであるとしておられる動き、つまり物財産業のサービス投入誘発度合の上昇それ自体が、ソフト化の何よりの証拠である。それは物財産業が生産物をソフト化するために、より多くのサービスを購入しなければならなくなっていることを示すと考えられるからである。これが物的部門内のサービス情報部門の外部化だけで生じているというのは、正しくないであろう。むしろより高度のサービス、情報を外部から購入せざるを得なくなっているので、投入誘発度合が上昇していると考えられる。

ソフト化については、他にも論じるべき点は多くあるが、産業構造論との関連では以上の二点が重要と考えるので、あえて指摘した次第である。(五月二十一日記)

(経済企画庁内国調査第一課長)

回答 変化動向の捉え方

宮沢健一

拙論「サービス化、情報化、ネットワーク化と産業社会」中の一点について、経済企画庁の加藤雅氏が批判を寄せられたことを歓迎し感謝したい。

ソフト化とは氏によれば、従来の産業構造論の枠外にあり一種の価値論の範疇に含まれるが、産業構造の変化に関係ないというわけではないとされ、概念化の意図が示された。小論の意図はもともと、機能的な概念化を軸とする産業社会の変化動向の把握に主眼がある。

したがって、変化の「原点はソフト化にある」との氏の捉え方に関連しては、小論中の次の論点を対置できよう。動向変化を促すものとして、工業化時代の「規模の経済性」の追求から、情報化時代の多角化の「範囲の経済性」追求へとソフトが生じているだけではなくて、情報ネットワーク時代には「連結の経済性」と名づくべき局面が開けている。それが、活動の投入と産出の両面における諸要素の「相対的価値」の変化を伴いながら、産業構造だけではなく産業組織にも影響を及ぼし、産業社会全般に変化を促している、とみる。

産業構造論レベルでの氏の指摘「物財産業のサービス投入誘発度合の上昇それ自体がソフト化の何よりの証拠」に関しては、次を指摘したい。つまりサービス化の変化動向の判定として、物↓サービスという上記の誘発ルート以外にも、サービス↓物、サービス↓サービスの内部誘発、といった諸ルートが併存し、それら誘発諸ルートの相対的な強度を、産業連関の分解分析手法によって評価し、識別することに拙論の力点がある。

また氏の指摘「これが物的部門内のサービス情報部門の外部化だけで生じているというのは正しくない」についても、小論では「だけ」とは言っておらず「を伴って」と書き、むしろ次